

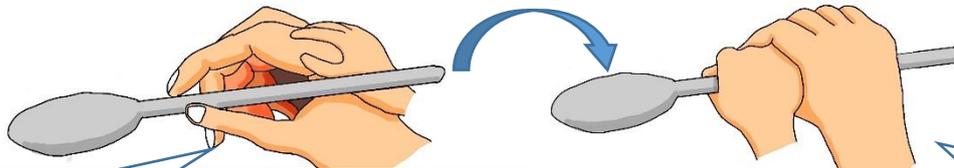
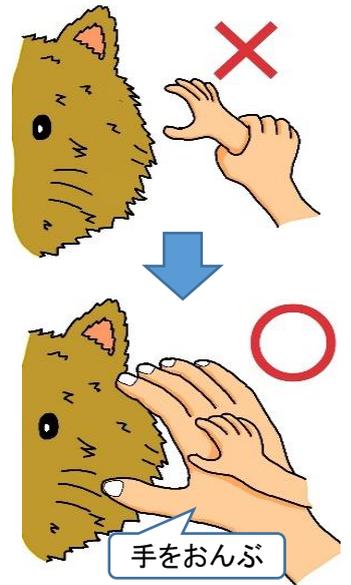


～一緒にやってみようか！～

視覚障害のある子どもは、周りの状況を把握しにくいことで、自分から人に働きかけたりおもちゃや遊具に手を伸ばしたりすることに消極的な場合があります。一般的に、見えにくさがある子どもは、事前の予告がなく他者に急に身体を動かされることに大きな不安を感じます。そして、「ほら、わんちゃんかわいいよ。触ってごらん。」などと促されても、不意に動いたりする動物だったりすると、なかなか手を伸ばそうという気になれないこともあります。ある視覚障害の方から聞いた話ですが、手をつかまれて触るように促されても、最初に触るのは自分の手であって、その人の手ではない。その人は触るものが見えていて分かっているけど、自分には見えないから得体が知れない。だから、子どもの頃すごく恐怖を感じたことがある、とのことでした。

そこで、まずは大人の手の甲に子どもの手を乗せて、大人の手が先に触れるようにします。安心できる大人の手の上から間接的に感触を感じつつ、そこから少しずつ一緒に触るという経験をすると、安心して直接触りやすくなります。安心感の保障がまずは大事ですね。

また、食事の場合で言うと、手づかみで十分に食べ物に触れる経験を積んだら、今度は大人がスプーンを持ち、その手を子どもが上から触ることで、スプーンを使って食べるという、動き全体を分かりやすく経験することができます。そこから徐々に、自分でスプーンを持ち、大人が支えながらスプーンを口まで運ぶ、最終的には自分でスプーンを使って食事を口に運ぶという順序でできるといいですね。



手づかみ食べが上手になったら、手をおんぶして手がどのように動いているかを体験して慣れます。

慣れてきたら、自分で使う経験に移っていきます。

目と手の協応という言葉がありますが、道具を使ったり体操やボール運動などで体を上手に使ったりできるようになるには、見る力は大きな役割を果たします。しかし、見えにくさ、あるいは見えないお子さんでは、見る力を十分に活用しきれないため、それを補うために上で紹介したように動作を補助してあげると、体の動かし方を覚えやすくなります。

スプーンなどの道具は、自分の指先からさらに伸びたところで食べ物をすくいます。そのため、指先のように触っている感触を感じにくく、口に運ぶときの距離や位置関係が分かりにくいものです。さらに、口に運んでいる途中で落としてしまうこともあり、重さの変化も感じなければならぬので、食べるだけでも最初はとても集中力を費やしてしまいます。お子さんがおいしく食べたり、自分から色々なものに触ってみたいという気持ちを育てることを最も大切にして、今回ご紹介したような取り組みができるとうれしいですね。